九州大学歯科口腔外科開設百周年を記念して

九州大学歯科口腔外科開設百周年記念事業準備委員会
高口　秀夫（九州大学歯科口腔外科同門会長）
中村　誠司（九州大学歯科口腔外科同門幹事長、歯学部10期生）
大部　一成（百周年記念事業準備委員長、歯学部13期生）

はしがき

今年で九州大学歯科口腔外科は開設100年を迎えます。すでに九州大学歯学部同窓会広報の69号と70号でご案内をさせていただきましたが、皆様方のご支援により、募金はほぼ目標額に達し、予定している3つの記念事業：記念碑の設置、百周年記念誌の刊行、記念祝賀会の開催、の準備を粛々と進めているところです。ただし、このコロナ禍を鑑み、2022年4月24日（日）に開催予定であった記念祝賀会については、皆様方にご参集いただくことは断念し、ビデオ等を用いたオンライン開催とし、九州大学大学院歯学研究院や教室（顎顔面腫瘍制御学分野）のホームページからご閲覧いただくことにしました。また、後ほど紹介をさせていただく教室歌（北原白秋作詞・山田耕筰作曲）を彫った記念碑は、九州大学大学院歯学研究院の玄関横に設置する予定です。今年度内には設置が完了する予定ですので、楽しみにお待ちいただければと思っています。

さて、今回の寄稿では、1922年（大正11年）の九州大学歯科口腔外科の開設以来の一世紀にわたる沿革を、当時のエピソードを交えてまとめました。九州大学歯学部の源であり、九州大学歯学部の歴史の一部でもありますので、ご一読いただければ幸いです。

１．医学部歯科学講座の開設

1918年（大正7年）に九州帝国大学医学部に歯科学講座増設の意見が出され、医学部第一外科学講座の問田亮次講師が教授候補者となり、米国やヨーロッパ諸国を3年間視察して、歯科学教育の実情調査を行いました。帰国後、1922年（大正11年）5月29日に歯科学講座が開設され、同年6月28日に問田講師が初代教授に任命されました（写真1、2）。建物は旧看護婦宿舎を改造した木造2階建が当てられ（写真3）、問田教授のもと、助手2名、医員2名、歯科用治療椅子11台、病床9床をもって、同年11月1日に診療が開始されました。当日の新患数は32名と記録されています。

写真1. 問田亮次 初代教授

写真2. 現在の教授室の前に置かれている問田亮次初代教授の胸像

写真3. 1922年（大正11年）の開設当時の教室

２．医学部歯科学口腔外科学講座に発展

問田教授は歯科学講座に口腔外科学講座を併設することが必要と考え、1927年（昭和2年）10月7日に講座名は歯科学口腔外科学講座、診療科名は歯科外科に改められました。その後、一般歯科

に加えて口腔外科の診療と研究が進められ、口腔外科的な疾患、特に顎骨ならびに口腔軟組織の炎症に関する研究が進められました。また、口唇裂・口蓋裂の研究も始められ、その後はこの分野が教室の伝統として継承され、わが国の形成外科学の発展に大きな影響を与えました。

教室の発展に伴い、1928年（昭和3年）1月8日に旧外科外来診療所および内科病棟を改造した木造平屋建に移転し、8台の歯科用治療椅子が追加されました。しかし、急速な教室の発展により手狭となり、1934年（昭和9年）3月20日には医学部整形外科学教室とともに地上4階地下1階の鉄筋コンクリート建築の病棟および外来棟が竣工され、その建物の一部は2010年（平成22年）まで使用されました（写真4）。なお、当時の歯科用治療椅子は40余りと記録されています（写真5）。

1940年（昭和15年）には、北原白秋作詞、山田耕筰作曲の教室歌が作られました（写真6、7）。縁があって我が国の二人の巨匠によって作られた格調高い教室歌は、同門ならびに教室員の大きな誇りとするところであり、この度の百周年事業による記念碑の設置は大変喜ばしいことと思っています。この教室歌は、代々の教室員によって現在も歌い継がれており、毎年開催されている同門会や教室行事を締める際には、全員で教室歌を合唱するのが恒例となっています。

1943年（昭和18年）9月30日に問田教授は旅順医学専門学校校長に任ぜられて退官し、同年10月9日に講座の開設にも参画した加来素六助教授が2代目教授に昇任しました（写真8）。その後、第二次世界大戦による多難な混乱期を経ることとなり、戦後には建物の一部は占領米軍に宿舎として用いられた時期もありました。程なく落ち着きを取り戻し、研究も活発に行われるようになり、口唇裂・口蓋裂を始めとした多くの疾患に関する研究業績が残されました。また、その当時の状況を反映してか、顎顔面の外傷、特に顎骨骨折に関する研究も多くみられました。

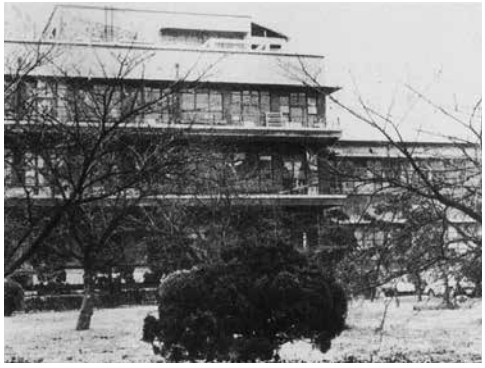


写真4. 1934年（昭和9年）に完成した教室

写真5. 1934年（昭和9年）当時の外来治療室

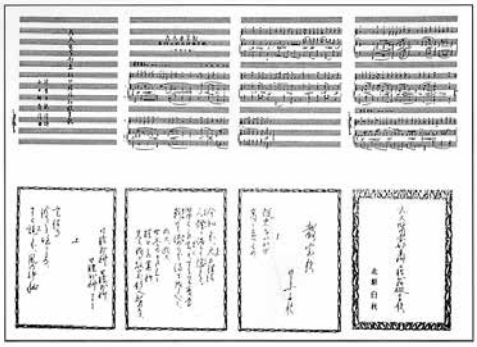
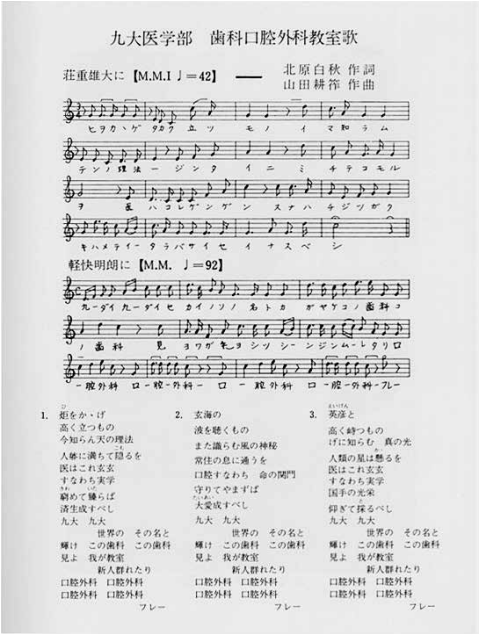


写真6. 教室歌（北原白秋 作詞、山田耕筰 作曲）の原本



九大医学部　歯科口腔外科教室歌

荘重雄大に【M.M.♩=42】 —— 北原白秋 作詞 山田耕筰 作曲

ヒヲカヽゲ タカク立ツ モノイマ和ラム

テンノ理法ージンタイニミチテヨモル

ヲ 見 ハコレゲンゲン スナハチジツガク

キハメテイータラバサイセイナスベシ

軽快明朗に【M.M. ♩=92】

九ーダイ九ーダイセ カイノソノ名トカ ガヤケコノ歯科コ

ノ歯科 見 ヨワガモヨシツシーンジンムーレタリロ

ー腔外科 口ー腔ー外科ー 口ー腔外科 口ー腔ー外科ーフレー

1. 姫をかゝげ
高く立つもの
今知らん天の理法
人体に満ちて隠るを
医はこれ玄玄
すなわち実学
窮めて勝らば
活生成すべし
九大 九大
世界の その名と
輝け この歯科 この歯科
見よ 我が教室
新人群れたり
口腔外科 口腔外科
口腔外科 口腔外科
フレー

2. 玄海の
波を聴くもの
また識らむ風の神秘
常住の息に通うを
口腔すなわち 命の関門
守りてやまずば
大愛成すべし
九大 九大
世界の その名と
輝け この歯科 この歯科
見よ 我が教室
新人群れたり
口腔外科 口腔外科
口腔外科 口腔外科
フレー

3. 英彦と
高く峙つもの
げに知らむ 真の光
人類の星は懸るを
医はこれ玄玄
すなわち実学
国手の光栄
仰ぎて探るべし
九大 九大
世界の その名と
輝け この歯科 この歯科
見よ 我が教室
新人群れたり
口腔外科 口腔外科
口腔外科 口腔外科
フレー

写真7. 教室歌の楽譜と歌詞

写真8. 加来素六 二代目教授

３．歯学部の設置により口腔外科学講座に変更

加来教授は、他大学の教授とわが国の歯科学教育について意見交換を重ね、歯科学教育はそれぞれの専門部門を総合した学部において行うべきであるとの方針を立て、1950年（昭和25年）1月25日の医学部教授会に提案し、歯学部設置の方針が承認されました。その当日、加来教授は藤野博助教授を含む教室員に対し、「歯学部を作る方針は今日の教授会で承認された。種はまいた。育て上げるのは後に続く教室員だ。」と話され、その言葉を聞いた藤野博助教授を始めとした教室員にとっては、その後の歯学部開設を進める大きな原動力となりました。

加来教授がこのような提案をし、教授会がそれを承認した背景としては、１）当時の歯科学口腔外科学講座は専門性が強く、構成員の大部分が歯科医師であった、２）第二次世界大戦の終結後、欧米の進んだ歯科事情が伝わってきた、３）近代化する歯科医学に対応するには、１つの講座では不十分であった、４）歯科医師が不足しており、増員が必要であった、５）歯科医師の養成は主に私立大学に委ねられており、当時の国立の養成機関は東京医科歯科大学歯学部のみであまりに少なかったことなどが考えられます。このような状況の下、国立大学における歯学部設置の機運が高まり、1951年（昭和26年）には大阪大学に国立大学として二番目の歯学部が設置されました。その後、歯科医師養成の必要性が強く言われるようになり、国立大学における歯学部設置と私立歯科大学の増設が計画されるようになりました。

1954年（昭和29年）3月31日に加来教授は定年退官し、藤野助教授が3代目教授に昇任しました（写真9）。藤野教授は、従来の研究を引き継ぎましたが、中でも口唇裂・口蓋裂に関しては、動物実験や遺伝学的基礎研究から臨床研究まで幅広い先駆的研究を行い、特に乳幼児に対する全身麻酔の研究により、治療成績は飛躍的に向上しました。著しい患者増加に伴い、1955年（昭和30年）には兎唇研究施設が設置され、病床は46床に増えました。

写真9. 藤野　博 三代目教授

藤野教授は、前述の加来教授の言葉を受け、歯学部開設に並々ならぬ努力を重ね、1962年（昭和37年）に初めて歯学部開設要求が医学部の概算要求に加えられました。当時の医学部には多くの要求事項がありましたが、1964年（昭和39年）7月3日には歯学部開設要求が医学部の最優先要求事項として取り上げられ、歯学部設立準備委員会が発足しました。その委員会は、学長、医学部長、藤野教授らで構成され、全学的な支援を得て、実現に向けて積極的に取り組まれるようになりました。しかしながら、政府の設置承認は容易には下りませんでした。その理由としては、１）学部と附属病院の新設には多くの定員が必要であった、２）これに対し、当時は岐阜、山口、神戸の３大学の国立移管が行われていた、３）1965年（昭和40年）には新潟、東北、広島の３大学に歯学部が開設された、４）福岡では九州芸術工科大学の誘致運動が盛んであったことなどが挙げられ、同時期に大幅な定員増を要するものが重なったことが一因であろうと推察されます。

写真10. 1967年（昭和42年）10月6日の歯学部設立記念写真
藤野教授（最前列の左から3人目）を始め、設立に尽力した遠城寺宗徳学長（最前列の中央）、入江英雄医学部長（最前列の左から2人目）、長尾　優東京医科歯科大学学長（最前列の右から2人目）、上野　正同歯学部附属病院長（第2列の右から2人目）、山本　巌大阪大学歯学部長（同5人目）、坪根政治九州歯科大学学長らが写っている。

このような厳しい情勢の中でも、藤野教

写真11. 1967年（昭和42年）当時の外来診療室（写真5と同じ部屋）

写真12. 1970年（昭和45年）に完成した九州大学歯学部研究棟

写真13. 1971年（昭和46年）に完成した九州大学歯学部附属病院

写真14. 藤野教授の功績を讃えた桜の寄贈植樹

授は学長、医学部長、大学事務当局とともに、政府の設置承認を得るために文部省や大蔵省と折衝を重ねました。また、九州大学歯科口腔外科同門会員を中心に福岡県歯科医師会と連携した九州大学歯学部設立期成会が結成され、さらに九州大学医学部同窓会福岡支部も同設立促進委員会を設け、福岡市議会などの関係各所に働きかけて基金を予算化したり、募金を集めたりして、地元がこぞって歯学部設立を強力に支援する体制を整えました。

その一方で、設置認可申請には教員組織の編成も重要な部分を占めると思われますが、全国的に歯科大学や歯学部の増設計画が進められたために、教員の確保は容易ではありませんでした。しかし、基礎講座の担当教授の多くは九州大学医学部から推挙され、口腔外科学講座以外の歯科独自の基礎ならびに臨床講座の担当教授は他大学の協力により有能な教員が推挙されました。さらに、加来教授の時代から東京医科歯科大学歯学部に教室員を派遣して人材育成に努めており、教員組織を編成するための準備は着々と整えられていました。

長年に渡る学内外の関係各位の弛まぬ努力が実り、1966年（昭和41年）の年末になって、ようやく政府が北海道大学とともに九州大学に歯学部を設置するという方針を決め、1967年（昭和42年）5月に「国立学校設置法及び国立養護教諭養成所設置法の一部を改定する法律」が交付されて確定しました。国会の事情で若干遅れましたが、同年6月1日に九州大学に歯学部が開設され（写真10）、同年6月10日、11日に初の入学試験が行われて新入学生40名を迎え、教養部での授業が開始されました。

歯学部開設と同時に、歯科学口腔外科学講座は口腔外科学講座となり、藤野教授が引き続き講座を担当しました。同年8月1日には歯学部附属病院が開院し、口腔外科という診療科名で診療が開始されました（写真11）。その頃、米軍機の学内への墜落事故を契機に学内紛争が激しさを増し、一時は藤野教授が学長代行を務めたこともありました。建物については、学内紛争のために計画どおりに進みませんでしたが、ようやく1970年（昭和45年）3月31日に歯学部研究棟第二期工事が竣工し（写真12）、1971年（昭和46年）9月30日には歯学部附属病院が完成しました（写真13）。

このように、藤野教授は九州大学歯学部の生みの親であり、初代歯学部長、さらには初代歯学部附属病院長を務めました。前述のように口腔外科学の領域では多くの輝かしい業績を上げました。その功績を讃え、2013年（平成25年）4月に九州大学大学院歯学研究院教授会一同で桜を寄贈植樹しました。現在の地下鉄の馬出九大病院前駅からの地下道から出て、馬出キャンパスに入ってからすぐ左側の歯学部Ａ棟（本館）の前に石碑とともにありますので、大学を訪問される際にはぜひご確認いただきたいと思います（写真14）。

４．講座の増設により２講座制に発展

1974年（昭和49年）4月1日、藤野教授の定年退官に伴い、同年4月1日に田代英雄助教授が4代目教授に昇任しました（写真15）。1977年（昭和52年）4月18日に口腔外科学の充実を図るために講座が増設されることになり、口腔外科学講座は口腔外科学第一講座（診療科名は第1口腔外科）に改称され、同年12月1日に新規の口腔外科学第二講座（診療科名は第2口腔外科）の初代教授に岡増一郎助教授が就任しました（写真16）。2つの講座は、当初は大講座として運営されていましたが、1985年（昭和60年）1月1日からは独立した講座として運営されるようになりました。ただし、交流は十分に保たれ、口腔外科学の学部教育は協同して担当しました。両講座は切磋琢磨することにより、従来の口唇裂・口蓋裂を中心とした幅広い研究と診療を継承しつつ、口腔癌の基礎的ならびに臨床的研究や歯科麻酔学と全身管理を充実させ、治療成績は飛躍的に向上しました。また、再建や外科矯正といった新しい分野の手術も積極的に取り入れられました。さらに、国際交流も始められ、ベトナムやミャンマーで口唇裂・口蓋裂や口腔癌の手術支援を行いました。

1994年（平成6年）3月31日の田代教授の定年退官に伴い、同年9月1日に大石正道助教授が口腔外科学第一講座の5代目教授に昇任しました（写真17）。さらに、1995年（平成7年）3月31日の岡教授の定年退官に伴い、同年10月1日に大阪大学歯学部口腔外科学第一講座の白砂兼光助教授が2代目教授に就任しました（写真18）。

写真15. 田代英雄 四代目教授

写真16. 岡　増一郎 口腔外科学第二講座初代教授

写真17. 大石正道 五代目教授

写真18. 白砂兼光 口腔外科学第二講座二代目教授

４．大学改革に伴って専門性を高めた大講座制に転換

2000年（平成12年）4月1日には大学院重点化に伴って大学院歯学研究院ならびに歯学府が設置され、大講座制への再編成により、両講座は歯科麻酔学講座、歯科放射線学講座、口腔病理学講座と共に大講座である口腔顎顔面病態学講座に編成され、口腔外科学第一講座は顎顔面腫瘍制御学分野、口腔外科学第二講座は口腔顎顔面外科学分野に名称が変更されました。また、病院でも顎顔面口腔外科という大診療科という名称になりました。両講座はそれぞれが独自に口腔外科的疾患全般の研究と診療を行いましたが、特に伝統である口唇裂・口蓋裂と口腔癌の先駆的な基礎的ならびに臨床的研究は強力に推し進められました。さらに、国際交流も盛んに行われるようになり、インドネシアやバングラディシュなどから多数の留学生を受け入れ、さらにインドネシアのハラパンキタ病院で口唇口蓋裂治療を立ち上げて現地の医療に貢献し、現在も交流が続いています。

2004年（平成16年）3月31日の大石教授の定年退職による退任に伴い、同年12月16日には口腔外科学第二講座の講師であった本稿の著者の一人である中村誠司が顎顔面腫瘍制御学分野の6代目教授に就任しました。2003年（平成15年）10月1日に医学部附属病院旧歯学部附属病院、生体防御医学研究所附属病院が統合されて九州大学医学部・歯学部・生体防御医学研究所附属病院となり、呼称は九州大学病院になりました。これにより、歯学部を有する国立大学としては本邦初の医科歯科統合の大学病院となり、

医科と歯科がより密接に連携を取りながら診療することが可能となりました。さらに、2005年（平成17年）4月1日には第1口腔外科は顎口腔外科、第2口腔外科は顔面口腔外科に改称されましたが、院内掲示では大診療科名である顎顔面口腔外科が用いられるようになりました。新病院の建物は2009年（平成21年）4月1日の外来診療棟の竣工により完成し、歯科部門の全ての移転が終了しました（写真19）。

写真19. 2009年（平成21年）に完成した現在の九州大学病院（顎顔面口腔外科の外来は5階、病棟は7階）

2009年（平成21年）3月31日の白砂教授の定年退職による退任に伴い、2010年（平成22年）4月1日には山口大学医学部歯科口腔外科学講座の森悦秀准教授が口腔顎顔面外科学分野の3代目教授に就任しました。この人事により現在の体制が確立し、顎顔面腫瘍制御学分野は口腔腫瘍と口腔粘膜疾患を、口腔顎顔面外科学分野は口唇口蓋裂、顎変形症ならびに顎関節疾患をそれぞれの専門領域とし、協同して口腔外科的疾患全般の診療と教育にあたっています。従来から行われてきた口唇裂・口蓋裂および口腔癌の基礎的ならびに臨床的な研究は継続され、さらに口腔粘膜疾患や唾液腺疾患に関する免疫学的な研究も加えられ、多くの研究が精力的に行われています。診療においても、院内の医科歯科連携だけでなく歯科部門内の連携も強化され、九州大学病院がんセンターの口腔部会、再生歯科・インプラントセンターならびにデンタル・マキシロフェイシャルセンターに参画して中心的役割を果しています。さらに、地域歯科医療機関との連携も強化され、患者数も着実に増加しています。ちなみに、1922年（大正11年）には歯科用治療椅子11台、病床9床で始まった診療科が、現在はそれぞれ21台、37床となっています。また、現在の教室員は、顎顔面腫瘍制御学分野が教員11名、医員10名、大学院生21名、出向者14名、口腔顎顔面外科学分野が教員11名、医員9名、大学院生10名、出向者5名であり、5名で始まった教室が、現在では総勢90名にまで発展しました。

おわりに

九州大学医学部歯科学講座の開設以来、九州大学歯科口腔外科同門会は続いており、現在は顎顔面腫瘍制御学分野が引き継いでいます。会員数は物故者の341名を含めて738名で、会員の中からは国内外で30名を越える臨床系ならびに基礎系講座の教授を輩出していますが、大学に限らず、会員は病院歯科口腔外科や開業歯科などで活躍しています。このことは、九州大学歯科口腔外科教室が開設当初から高い学問的理念を掲げて診療、教育、研究にあたり、教室歌の歌詞の中にある「新人群れたり」をしっかりと受け継ぎ、後進を育て、伝統を築いてきた証しであろうと思います。2022年（令和4年）3月末に森教授が、翌年の2023年（令和5年）3月末に中村が定年退職の予定ですが、後進の頑張りにより、次の一世紀においても、さらなる発展を遂げて欲しいと祈念しています。